

INDEX

- 1 「信仰が人を殺すとき」を読んで - ある「怖さ」との対面 - 大喜多秀起
- 2 高橋弘のモルモン人物伝(6)
テルマ・ギアーが語る「マウンテン・メドウの大虐殺」最終回
- 3 投稿 「モルモンからカトリックへの回心への道」
(ガーマントからロザリオへ、苦しみから喜びへ) - 上 -
St francis of Assisi
- 4 連載 リアホナを斬る (第6回) 木塚灯八
2005年7月号 大管長会メッセージ
「主は心の打ち砕かれた者を癒される」
- 5 モルモンQ & A 「宣教師の規則」(その2) 重島雅弘
- 6 ニュース

「信仰が人を殺すとき」を読んで - ある「怖さ」との対面 - 大喜多秀起

熱心なモルモン教徒だったころ、適当な信仰生活を送る連中がたまらなくいやだった。さしたる教会への奉仕もせず、集会には平気で遅刻し、日曜日もわざわざしごとを優先する会員たち。テキスト棒読みの程度の低いレッスン。世間話にも及ばないくだらない聖餐会の話し。見るからにやる気のない外国人宣教師とそれに群がる軽薄な女性たち。「こんなことで良いのか」と義憤を感じる事もモルモン教徒としての生活の一部だった。

クラカワの「信仰が人を殺すとき」を読み進めていくにつれ、次第に大きくなって行く「怖さ」があった。それは同書に登場するラファティらが原理主義に傾斜して行く動機と私の義憤に共通性を覚えたからだ。ラファティらは突然狂気に走ったのではなかった。彼らも最初は単なるモルモン教失望者であったに過ぎない。モルモン教が少数派の場であれば、教団を離脱して、普通の宗教生活に帰ればそれで一定の型は付く。日本でもそうだ。しかし、ユタ州のモルモン教徒だったらどうなっていたらどうか。モルモン教を離脱してもその先にあるのやはりモルモン教社会である。そこには脱会とは別の進む道がある。より純粋なモルモン教徒(原理主義者)になると言う道である。

長い年月、モルモン教は表面上は変わったふりをしてきた。そのうち、この「おもてつら」がモルモンの顔に見えて来だした。しかし、現代モルモン教の行っているのは宗教ではなく、資産運用、ビジネス発展、政治勢力の拡大である。純なモルモン教徒には分かってしまう。「これらは変化ではなく変節である」と。そして彼らはすぐに200年程前の「古き良き時代」のサンプルを見つけて出される。救いのために家族、赤ん坊でさえ殺し、妻の多さが信仰の深さを示すなどと常軌を逸した教えである。しかし、それは予言者により、永遠に変わらぬ教義として教えられ、確かに実行されていたことなのだ。

キリスト教、イスラム教などの原理主義は回帰を謳いながらも、その実はまっとうな宗教からの逸脱、カルト化である。しかし、モルモン教原理主義者はそれらとはいささか違っている。まさしく「理想への回帰」である。彼らこそまさしくモルモン教徒なのである。私がもしユタにいたなら、モルモン原理主義者になっていた可能性がなくはない。そして「神の旗の元に」犯罪者となっていたかも知れない。

私の感じた「怖さ」はモルモン脱会者の多くが共用するものであろう。

高橋弘のモルモン人物伝(6)

テルマ・ギアーが語る「マウンテン・メドウの大虐殺」最終回

過去二回にわたって述べてきたことは、特に断り書きがないものは、すべてテルマ・ギアーの書いたものを翻訳・紹介したものである。テルマの述べていることは、その後モルモン教会の「スケープ・ゴート」として処刑されたジョン・D・リーの妻たちやその子どもたちによって語り継がれてきたこと、すなわちリー族に伝わってきた口伝の伝承であるが、そこには、最新の研究によって明らかにされた成果からすれば誤った記憶であることが多々ある。

それはたとえば、リー族に伝えられている「マウンテン・メドウの虐殺」の物語では、移民の男たちを襲って殺害したのはモルモン教徒であったが、婦女子を殺害したのはインディアンだった、という言い伝えである。最近の発掘と頭蓋骨等の検死結果は(註1)、婦女子も銃弾によって殺害されており、婦女子を冷酷に殺害したのもモルモン教徒だったこと、この「マウンテン・メドウの虐殺」にインディアンは間接的にしか関与していなかった、ということをも明らかにしている。

テルマのように、ジョン・D・リーの直系の子孫であるにもかかわらず、では、なぜ誤ったことを聞かされてきたのか、ということが疑問になるであろう。それには多くのページを割いて説明する必要があるが、一言でいうなら、ブ

なわちブリガム・ヤングは、ユタのすべての信徒を文字通り支配し、対外的方針も自らが決定してきたのである。

ジョン・D・リーに関する情報の混乱は、リーの運命の二重性に原因がある。すなわち、それは「マウンテン・メドウの虐殺」事件以降も永くリーはブリガム・ヤングに寵愛された忠実なモルモン教徒だったということと、にもかかわらず、リーはその後ブリガム・ヤングから、連邦政府からの糾弾をかわすため「スケープ・ゴート」（註2）として教団から破門され、断罪され処刑されるという運命を経験したからである。モルモン教会を愛し、その教会に最大限の忠誠を尽くしてきた模範的信徒が、一夜にして教会から棄てられ失意のどん底に落とされたのである。

1857年の虐殺事件から13年後の1870年、リーは虐殺事件の責任をとらされてヤングによって教団から破門を受けた。ヤングがリーを破門したのは、この虐殺事件はモルモン教会となんの係わりもないというジェスチャーであった。この間リーとしてもヤングの期待に応え、たとえそれが自分の家族であっても、虐殺事件が教団トップの指示の下に行われたことを口が裂けても語ることはなかったであろう。なぜならそうした口外はヤングへの裏切りだったからである。しかし晴天の霹靂ともいべき1870年、リーは教団から破門され、虐殺事件から20年後に当たる1877年、銃殺刑に処せられた。断罪と処刑の間の数年間、リーは失意のなかで自らの人生を綴り始める。死を目前にしてもはやリーには虚偽を語る必要がなくなった。リーの自叙伝は、こうして獄舎のなかで死を見つめながら綴られたものであった。

テルマの手記のなかでもっとも説得力のある部分は、虐殺事件後のセダー・シティを覆った名状しがたい陰鬱な空気を指摘した部分であろう。ソルトレーク・トリビューン紙のマーク・ヘヴンズによれば、百年以上経った現在でも、セダー・シティは得体の知れない陰鬱さで覆われていると語り、「この虐殺事件は今でも近隣の村々に暗い影を落としており、虐殺事件に加わった者の子孫たちは、この忌まわしい事件を早く記憶から消し去りたいと願っているものたちと、正義を行うために間に葬られた事実をはやく明らかにすべきだと主張するものに、分かれている」という（註3）。

2003年1月、この虐殺事件について画期的な本を著した歴史家であるバグリー氏（註4）は、南ユタ大学での講演でこう語った。「この虐殺にかかわった者たちは、その事件以降とほうもない苦悩に悩まされるようになり、そのためモルモン教会大管長ブリガム・ヤングにこの苦しみをどう解決すべきか何度も助言をお願いした。しかしヤングはこれに対し、嘲笑、恫喝、沈黙で応答した」。

以下、テルマ・ギアーの手記から離れ、この虐殺に関する要点のみを指摘しておきたい。

1. 計画的犯罪であった。

当時ヤングは、今日の統一教会同様、異邦人（教徒以外の者）から金品を騙し取ったり奪ったりすることは悪ではなく、推奨すべきこととしていた。モルモンの教祖らは、偽札を使用して正貨や物品を騙し取ろうとしたことは一度ではない。ユタでは「ふらちな悪党がここにやって来たら、そいつらの喉を掻っ切れ」とヤングは信徒を恫喝していた。マウンテン・メドウで殺害されたファンチャー隊は今日の金額では数億円の財産（家畜や金貨など）を持ち、飢饉と物不足に悩まされていたユタのモルモン教徒には、見逃せないカモに映ったであろう。すでに数週間ユタを移動していたファンチャー隊がモルモン教徒に危害を及ぼす連中ではないことを知りつつ、様々なデマをとばして彼らを「敵」にでっち上げ、襲撃したのである（註5）。

計画的であったという理由は、虐殺事件に地域の教団トップ（ニーファイ・ジョンソン）の決断があったこと。当時ユタではヤングの指示なしに何事も為されなかったことを考慮すれば、ジョンソンが教団幹部に相談もなく決断するわけがない。ジョンソンはその後何ら処罰を受けていない。またハンブリングがインディアン酋長を連れてヤングに会い、その7日後にインディアンの酋長たちがファンチャー隊を襲撃したことである。

殺害され略奪された財産の多くは、そのまま教会に献上されたわけで、モルモン教会は、こうした歴史を経て、急激に豊かになっていったという指摘もある。

異邦人からの略奪は、また、モルモン教徒がミズーリーやイリノイで失った財産を奪い返すための正当な行為と考えられていた。したがってブリガム・ヤングの主張では、この世では犯罪と映ることも、モルモンの法（信念）からすれば、信仰に適った行為なのであった。

2. ブリガム・ヤングの恐怖心。

テルマが述べているように、新しく指名されたユタ準州の総督（知事）ジョンストン将軍と2500名の連邦軍は、ヤングの逮捕・処刑のために派遣されたのではないかと、ヤングは本気で疑っていた証拠がある。連邦役人が追放され、非モルモン教徒はユタから追放された。モルモン教団は西部に神権政治、独裁制をしき、ユタに連邦法と相容れない多妻婚（重婚）を実行し、それを信仰の自由と公言して憚らなかった。

モルモンの法が世俗の法より優れていると公言していたにもかかわらず、ヤ

逮捕・処刑もありうることを知っていて、いよいよユタに新総督が派遣されること聞いたとき本心は恐怖でおののいていたはずである。だからこそ、ユタの自警団ともいべきノーヴー軍を3000人も用意し、自らの逮捕・処刑は何としても避けたいと考え、信徒たちに対立・戦闘意識を高める必要があったし、実際、ヤングはあらゆる手段を用いてそうしたのである。セダー・シティには使徒ジョージ・A・スミスが派遣され戦闘意欲を鼓舞していた。ファンチャー隊は、連邦軍のスパイであるという「デマ」が故意に流され、あるいは使徒パーリー・プラットの復讐を果たすべきだと扇動され、それがモルモン教徒を冷酷な集団虐殺へと駆り立てたのである。

3. 組織的隠蔽。

集団虐殺が終わったとき、虐殺にかかわった地域の指導者たちが自らの行為の重大性に遅まきながら気がつき、精神的に耐えられなくなっていった。独裁者としてユタの信徒をも冷酷に粛清してきたヤングにとって、異邦人を虐殺し、財産を奪うことなど朝飯前のことで、何の躊躇もなかったはずである。ヤングは、最初からこの虐殺事件はインディアンの仕業だと主張し、モルモン教団の関与を否定していた。しかし、モルモン教徒の事件への関与が否定できなくなったとき、今度は一人の信徒を「スケープ・ゴート」にし破門・処刑に処した。結果として、この隠蔽という策略は功を奏し、この難題も一件落着となった。(以下、スペースの関係で割愛)

註1 調査主任シャノン・ノヴァクによる、虐殺された移民の検死は、ユタ知事レーヴィットによって直ちに中止になった。因みに知事レーヴィットは、虐殺に加わったモルモンの子孫である。

註2 結局この虐殺事件は全米に知れわたり、モルモン教団にたいする国民の非難と激怒の嵐が起こった。新大統領ユリシーズ・グラントは「マウンテン・メドウの虐殺」実行犯、アイザック・ハイト(クラカワの『信仰が人を殺すとき』では、イサーク・ヘイト)、ジョン・ヒグビー、ジョン・D・リーを、懸賞金つきお尋ね者に指名した。

註3 Mark Havnes, "Historian Speaks on Mountain Meadows Near Site of Incident," Salt Lake Tribune, 2003 JAN 24

註4 高橋はこれまで、ジュアニタ・ブルックスの『マウンテン・メドウの虐殺』(1962)をもっとも信頼できる研究として参考にしてきたが、つい最近になって、今まで知られていなかった記録を丹念に検証し、ブルックスの説をさらに推しすすめ、「マウンテン・メドウの虐殺」を新しく書き直した研究があることを知った。それはジョン・クラカワが『信仰が人を殺すとき』にも参考にしてしているウィル・バグリーの『預言者たちの血 - ブリガム・ヤングとマウンテン・メドウズの虐殺』(2002)である。

Will Bagley, Blood of the Prophets: Brigham Young and the Massacre at Mountain Meadows, University of Oklahoma Press, (2002).

またSally Denton, American Massacre; The Tragedy of Mountain Meadows, September 1857, Alfred A. Knopf, 2003 が出版され、その中でデントンは、虐殺はヤングの指示と承認の下に行われたことを当時の資料と虐殺に加わったモルモン教徒の子孫からの聞き取り調査によって明らかにしている。この結論はバグリーとも一致する。

註5 ブルックスは『マウンテン・メドウの虐殺』で、ヤングがファンチャー隊を妨害せずそのままユタを通過させるよう手紙を書いたが間に合わなかった、と述べ、ヤングは虐殺に関わっていなかったばかりでなく、虐殺はヤングの意図ではなかったと述べた。

しかし同時にブルックスは、新たな証拠が見つければ、こうした記述は書き換えられる蓋然性が高いことを指摘している。

2000年に入ってから出版された、ジャーナリストや歴史家の手になる「マウンテン・メドウの虐殺」にかんする本(デントン、バグリー)は、40年前のブルックスが叶わなかった新しい資料や証拠を用いたもので、これらの本は虐殺が教団トップが関与する組織的事件であったことを明らかにしている。クラカワのみが、この点ではブルックスの説をそのまま継承している。

投稿 「モルモンからカトリックへの回心への道」
(ガーマントからロザリオへ、苦しみから喜びへ) - 上 -
St francis of Assisi

「アッシジの聖フランシスコこれがあなたの霊名です」この言葉を洗礼の時うれしさの涙とともに受けて5年たちました。いまではカトリックにたくさんのお友達、お世話になった神父様、修道士、シスターと常に神様に愛されていると感じるやすらかな毎日です。

もちろんカトリックに変わっても、フィアンセの死など人生の試練もあり大変な時もありますが、常に前向きに生きています。今ではモルモンだったころの苦しみ、悲しみ、時には怒りも今にいたる神様の御心だったんだらうなと感じています。

モルモンの人たちは、モルモンやめると不幸になるっていいですよ。墮落するって。

ですので、モルモンの中のモラルと全然変わってません。むしろモルモンの人たちの方が一見高い道徳基準守っているのはうわべだけという現実は何度も目にしました。

今モルモンやめようとしているけどモルモンの「滅びの子」の恐怖におびえている人たちに、少しでも決してそうではないということをお伝えしたく、この小さき私の経験を差し上げたいと思います。

モルモンの間違った解釈をされているイエス様が本来聖書にかかっているイエス様をゆがめて伝えているだけです。滅びの子なんて姑息な手段で信者を縛る教会の方がどうかしてますね。

モルモンだったころの私

17歳でモルモンになった私でした。まじめに馬鹿がつく性格の私はいわゆる「活発」といわれる会員でした。高校生の時教会に入り始めは祭司、ボーイスカウト、若い人たちの集まり、ダンスパーティなど。

大学の学生時代は猛勉強による勉学（奨学金をもらうため図書館、実習室にばかりいました。成績はかなり良かったです。）、そしてその合間には教会の奉仕で私の青春時代は過ぎていきました。

教える能力があったようでおもにSunday School関連の責任者、ボーイスカウトの団長をしてました。戒めを実直に完璧に守るように教会活動もかなりの活発率でした。いわゆる模範的な信者でした。

皆様なんとなく気がつきましたか?? そうです。恋愛したり学友と共に楽しく遊んだり、そして今でも独身ですが伴侶を見つけるという青春時代のもうひとつの大切なものを、勉学と教会のためにささげてしまったのです、、。もう取り戻せない大切な経験を、、。

迷い

熱心だったのですが、残念ながら熱心に教会の活動をすればするほど教会に疑問が湧いてきました。

知的側面では私勉学が好きですがそれによつての疑問です。

まずは考古学、歴史学において始めはJoseph Smithのようになろうって独学で始めた古代エジプト語、古代アメリカのマヤなどの知識を深めるに従いBook of Mormonなどの矛盾点が大きくなっていきました。

特にBook of Abraham のヒエログリフの部分は、私にとってはクリティカルでした。明らかにヒエログリフ本来の文書とJosephの翻訳は全然違っていました。

さらにBook of Mormon自体もこれを信じるには致命的な矛盾点が多々ありました。

聖書のほうが私は好きだったので熱心に読みましたが、なにかモルモンの人たちのやっていることって聖書の教えとずれているんじゃないのって思いがありましたね。なにかイエス様が非難されていたパリサイ人のような言動がモルモンの人たちの中に多々見受けられました。イエス様が皆を十字架にかかれることによってそういった決まりから解放したはずなのに、、。

東洋系である私は日本をルーツに持ち、それに誇りもっていた私はモルモンのYellow、Blackが前世での報いをうけた一段劣るものであるという人種差別的なくでも私の祝福の系統は白人に多いらしいエフライムなんですか??) 信者による態度は悲しくもあり腹立たしいものがありました。あとは身体障害者も前世での報いであんなようなモルモンの人たちの態度って、そういった人たちを助けたいという思いがある私には到底許しがたい発想でした。私は差別が大嫌いです。同じ人間なのになんで?

そしてまるで信者を口バのように考え、暇もないほど多忙にさせ休むことを許さない教会。

私の周りもそのため沢山のうつ病、心身症の信者がいました。

教会指導者に絶対従順を誓うまるでNorth Koreaのような制度、プライバシーも無視したような信者間の人間関係、そして教会のために本来常識であるはずの社会通念を無視した言動の数々、低所得者の人にも強制的に徴収する十分の一制度など、熱心に教会に通うほど疑問点は増していきました。

しかもその使い道は公開されていないし、教会上層部の贅沢な暮らし振り等等。

その疑問点を尋ねても周りからは、信仰が足りない、滅びの子になる、指導

すぐ”証”とかに逃げて「自己完結」してしまうのにうんざりでした。

休むことを許さないモルモンでrat raceのような体制は仕事の激務とあいまって、私の体も段々蝕んでいきました。

休もうとすると”証が足りない”っていわれながら自分の体を酷使して。教会の戒め守るため転職もしました。

無理をおして責任も果たしました。私自身もそう、やはり信仰が足りないと“思い込み”体調不調をおして必死になってました。

やめたら滅びの子だと思っていたから。段々と幸福のために入ったモルモンが私の心を闇に引きずりこんでいきました。軽いつつ状態になり病院の先生から薬を処方してもらったりもしました。カトリックになったらあっさりと治ってしまいました。

長年の無理により心身ぼろぼろになり、とうとう入院することになりました。その時の監督の態度とても信じられなかった。

「信仰が足りないからこんなぶざまな姿になる。はやく起きろ」って。そして「あなたが休むと教会の責任ができない。どうするの？」って。

あのですね、私その時、点滴うけて動けない状態なのでそれは物理的に無理でしたね。私は教会の便利屋じゃない！！

どこまで教会で無理すればいいの！！死んでしまうまで！！！！????
そうでしょうね。モルモンは命まで教会にささげていますからね！！。

その監督に医者もあきれていましたね。面会時間も過ぎているのに居座ってしかも臆面もなく渡されたBook of Mormonはあっさりごみ箱に捨てられました。そして一言「Crazy」って。

他にも教会のそういった体質を見てきたので、その時モルモンは信者よりも組織を大切にするとということわかりました。安らぎを求めて、イエスさまを求めてモルモンになったけど。友人たちが言っていたことをその時理解しました。モルモンはキリスト教とっているけどそうではない。

カルトなんだと。

モルモンからなにかへの探求

すっかりモルモンに愛想をつかしてました。でもやはり長年熱心だったモルモンでしたので、その葛藤もありました。そこでふと他の宗教はどう言っているのかと考えました。

モルモンはすべて間違っているといっているけど、真実を知りたかったのです。

入院中時間もあったので、聖書そしていろいろな宗教の経典を読み始めました。

聖書はもちろんイスラム教の聖クラーン、ハディース、仏教のダンマパダ、法華経など、日本神道の解説書友人のくれたヒンズーの聖典等もありました。その他の聖典の数々を読みふけりました。

あとは各宗教の解説書群。読んだ本は60冊以上ありました（笑）。

そしてそれらをBook of Mormon、モルモンの教義とを比較検討しました。お祈りもしました。

比較検討の結論は、モルモンという狭い世界で頑迷に他を否定して来た考え方がいかに間違っていたかというものでした。

なんて狭い世界でなにも考えずというよりも“多忙の中考えさせられず”、モルモンに一種の洗脳を受けて単一的な二元論のようなある意味危険な考え方に“させられていた”か、が分かり背筋が寒くなる思いしました。

そしてモルモンが言っているカトリックが悪魔の教会という考え方がとても信じられなくなっていました。

悪魔の教会なのになんでマザーテレサ、世界の平和に貢献したヨハネ・パウロ2世、その他偉大な業績したが人いるのか。

そしてプロテスタントにも黒人差別と戦われたキング牧師のような人いるのか。根本的に他を間違っていると断定する頑迷なモルモンの教義自体が、私にとって意味のないものになりはじめていました。

(次号へ続く)

連載 リアホナを斬る (第6回) 木塚灯八
2005年7月号 大管長会メッセージ「主は心の打ち砕かれた者を癒される」

次の二つの言葉は何のことかお分かりになるでしょうか？

- ・真にへりくだる心と悔いる精神
- ・打ち砕かれた心と悔いる霊

前者は昔の「モルモン経」に記載されていた言葉で、後者は現在の「モルモン書」の言葉です。いずれも英語の原典の「a broken heart and a contrite spirit」を訳したものです。皆さんはどちらのほうが適切だと思われませんか？モルモン「経」でも「書」でも翻訳のおかしな箇所は多々あるのですが、特にモルモン書のほうは無理やり英単語に日本語を当てはめた感じでまるで中学生の訳文のような拙いところが多々あります。たしかに「broken heart」をそのまま約せば「打ち砕かれた心」かもしれませんが、私には日本語としてヘンな感じがします。こういう話をしている理由は、今回取り上げるリアホナ2005年7月号の大管長会メッセージのタイトルが『主は心の打ち砕かれた者を癒される』だからなのです。

本題に入りたいと思います。話者であるファウスト副管長はまず詩篇147章から引用します。『主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる。』（聖書にも「心の打ち砕かれた」という表現はあるようです）現代社会にはストレスとなるものが多く、霊的に病んでいる、悪を求めてやまない人は神の平安を得られないのだとファウスト副管長は何の根拠も無く断言します。私たちは心に慰めを与えてくれる癒しの力を見つける必要があり、それは神の御霊と交わることにより得られるのだとファウスト副管長は話を進めていきます。

そしてファウスト副管長は、アリゾナのリーの船着場（リーズ・フェリー）で船頭をしていたウォーレン・M・ジョンソンの物語を紹介し、彼が子供をジフテリアで亡くした時のつらい思いを当時のウッドラフ大管長に宛てた手紙や、その後主から慰めを受けたという手紙を紹介し、しかしウォーレン・M・ジョンソンという人がどのような人か知っているモルモン会員はどれくらいいるのでしょうか？私も最近その本を読むまでは知りませんでした。その本とは「信仰が人を殺すとき」です。そこにはこのように書かれています。

一八七四年に、リーが逮捕され、投獄されると、モルモン教会は重要な渡しの仕事を存続させるために、リーの妻 エマの手足となって働いてくれるウォーレン・M・ジョンソンという信徒を雇い入れ、二人の妻と子どもたちとともにコロラド川の北岸にあらたに住まわせた。一八八八年六月十二日には、ジョンソンの妻のひとりグレース・フェリーで男の子を産んだ。赤ちゃんはロイ・サンダーランド・ジョンソンと命名されたが、後年、その子が長じて原理主義者教会の預言者となり、皆からアンクル・ロイと呼ばれることになるのである。（「信仰が人を殺すとき」P.337）

知ってか知らずか、ファウスト副管長は原理主義者グループの祖先の信仰を称えるということをしてしまっています。私は大管長メッセージを読みながら苦笑してしまいました。

さてファウスト副管長は、今日の教会には癒しの賜物があり、その力を受け癒される方法を主はたくさん用意しておられると、その方法の紹介を始めます。ここからはモルモン指導者の説教のいつものパターンですが、神の祝福を受けるための有り難いハウツー講座が始まるのです。それらを要約すると、

- ・神殿に入る
- ・聖典を読む
- ・知恵の言葉を守る

などらしいです。そして「救われたいと思うならば、今この世にあって働くたくさん破壊者からしっかりと身を守らなければならないのです」と強調します。説教のテーマは主が癒されるということだったはずですが、これではまるで、自分が為すべきことをしっかりやってないから癒されないのだと言わんばかりです。癒されたければモルモンの教えを守れということなのです。

しかしモルモンの教えをしっかりと守っても、ファウスト長老によれば、霊的な癒しとは私たちが暮らす世の中で何か変化が起こる物ではなく、聖餐会で与えられる物であるらしいです。聖餐会での会員の話や音楽が魂の食物になるとファウスト副管長は説きます。しかしそれはモルモン会員が毎週普通にやっていることであって、心の打ち砕かれた者に主がお与え下さる癒しなのでしょう。福引の一等賞が次回の福引の抽選券だった、みたいな気がします。

ここでファウスト副管長は面白い話を紹介します。監獄や捕虜収容所で最も生き延びることができた人は収容されているほかの人のことを心配し、食料などを分け与えていた人たちということが研究により明らかになった、ということです。モルモン会員の信仰生活を監獄や捕虜収容所に喩えるファウスト副管長のセンスの良さには脱帽するしかありません。

さらにファウスト副管長は癒しを受けるために必要な条件をこれでもかと列挙します。

- ・教会幹部や指導者と心をつなぐこと

- ・祈り
- ・愛に溢れた優しさ
- ・悔い改めと従順

そして最後にこう言い放ちます。「完全な悔い改めができれば後は簡単です」しかし、誰がそのようなことをできるのでしょうか？ これでは重荷を負う者にますます重荷をのせるようなものです。「完全な悔い改め」などと輕輕しく口にできるモルモン幹部は他人の苦悩などかけらもわかっていない人たちではないかと思えます。

はっきりしていることは、モルモンの教えでは、主に癒されたいと望む者はその代償を払わなければならないのです。それは聖書に書かれたイエスの教えと合致するようには思えません。はたしてイエスは、癒しを求めてきた人に「あなたは聖典を読んでますか？ ちゃんと祈りをしていますか？」と条件をつけるのでしょうか？ おそらくイエスなら気前良くこう言うでしょう。

「あなたの罪は赦された」
 主の与えてくださる癒しとはこういうものではないでしょうか？

モルモンQ & A 「宣教師の規則」(その2) 重島雅弘(しげ)

Q: もう少し、宣教師のルールについて知りたいのですが??

A: 今回は、宣教師の対異性関係のルールを紹介してみたいと思います。

~ 神戸伝道部、1991年12月の改訂版より ~

「4.3 異性とふざけてはいけません 他の異性に対する関係」
 教会員や非教会員、または宣教師にかかわらず、異性とふざけることは許されません。異性との会話がふざける行動かどうかの質問ですが、安全なコースとしてそれを解決する方法は、異性との会話を長く続けられない事です。親しくすることはいいですが、ふざけ合わないで下さい。宣教師としてあなた自身が異性に対してロマンチックな気持ちがあったなら、直ちにディストリクトリーダーかゾーンリーダー、または伝道部長に報告しなければなりません。伝道部内で決して異性に手紙を書いたり、文通をしないで下さい。しかし、ディストリクト内で、現在の求道者に伝道活動のための正当な理由か、リフェローに関連したもので他の宣教師や会員を含めて、伝道の助けになることならいいです。

私が、専任宣教師として在任中、または、教会員としてモルモンに関わっていた間、専任宣教師による異性との問題は後をたちませんでした。私が宣教師として在任中の2年間で少なくとも数名のものが、「純潔」の律法を破り、母国へ強制帰還されました・・・その様な問題が起こらないために、上記のように「伝道部内の異性に電話・手紙を書く事は禁止」「英会話などで教会にいる時は、必ず同僚と同じ部屋にいる事」が繰り返し、繰り返し強調されていました。縛り付けなければ、問題を起す。逆に、問題が起こるたびにルールが増していく・・・。ルールによって専任宣教師を縛らなければ、宣教師としての資質を維持できないモルモンの専任宣教師達は本当に、主、イエスキリストより福音を述べ伝えるために召された使者なのではないでしょうか??

ニュース

会報5号でもご案内しておりますが、ジョン・クラカワー著「Under the Banner of Heaven : A Story of Violent Faith」の邦題訳本「信仰が人を殺すとき」が河出書房新社より4月20日に出版されております。
 (当会報でおなじみの高橋弘先生が日本語版解説執筆をご担当されました)
 産経新聞(6月20日)や文芸春秋(8月号)等で書評が紹介されております。ご興味のある方は是非お読みください。

当会でも取り扱いしています。ご注文は以下から。

<http://seitonomichi.maxs.jp/mart/mart>

勇気と真実の会は会員募集中です。
 詳しくは当会へお問い合わせください。
 投稿記事募集
 脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。
 文章はプレーンテキストで作成してください。

メールマガジンバックナンバーはこちらから
<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>
 メールマガジンの購読申し込みはこちら
http://iemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe_mailmaqa.htm

- ・ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>
- ・メールアドレス jemnet@infoseek.jp

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.
無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。
転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。